

子ども主体の活動保障における軽度発達障害（広汎性発達障害）児の発達支援

一言語・社会面の発達が顕著にみられた5歳・男児の事例から

山崎 みよ子

(静岡大学大学院修士課程2年)

I 問題と目的

1) 問題意識

私は、母子保健法で規定されている一歳半健診・三歳児健診や、静岡県総合発達相談などへ発達相談員としてかかわっているが、軽度発達障害が疑われる子どもの相談が多くなっている。

障害児認定を受けた場合には、不十分ではあるが、専門性の確保や福祉圏域の療育システムが用意されており、地域療育支援システムが整備されつつある。しかし、乳幼児期からの学童期を見通したていねいな発達支援が必要である軽度発達障害が疑われる子どもの場合には、発達支援システムがほとんどないのが実情である。そのことは、親の不安を増大させ、不適切な対応による本人への二次障害の発生にも繋がっている。

そこで、2004年4月、同じ問題意識をもつ発達相談員と保育者とともに、発達を決定づける主導的活動であるあそびを中心とした保育をつくりだし、軽度発達障害が疑われる子どもの発達支援活動をはじめた。

約2年を経た現在、そこに通う子どもたちの発達の変化を実感している。軽度発達障害が疑われる子どもには、このようなあそびを中心とした通園施設が必要であることを子どものようすから実証したいと考える。

2) 目的

保育園・幼稚園に通う軽度発達障害（広汎性発達障害）が疑われる子どもの発達支援において、大人や仲間（子ども）との相互関係のなかで、「そのときの子どもの気持ち」に目を向け、子ども主体に主導的活動であるあそびを保障することにより、発達のみならず乗り越えることができると仮説し、事例的に検証する。

II 方法

1) 対象児の概要

(1) 生育歴等

1997年12月生。在胎38週。生下時体重2,543g。

定額3か月。座位6か月。初歩1歳1か月。

乳児期は、夜泣き、人見知りが多い、癩癩も強く、育てにくい子どもであった。

3歳保育園入所後は、多動・他児に乱暴など、集団生活における問題が表面化する。

(2) 家族構成 父、母、本児（A男）、弟の4人家族。

(3) 所属 私立保育園（2001年4月3歳時入園）

2) 発達支援を実施した場所

発達支援グループ NPO まほろば

3) 実施期間 2002年10月より現在まで

4) 総合所見〔発達の現状および問題点〕

全体的に発達年齢1歳半位の発達の遅れがみられる。各領域内での発達のばらつきはみられない。

他者とのコミュニケーションがとりにくい時、一方的に話を始める。場面に適したことばや相手に向かったことばがでていない。ことばでの指示はとおらない。

集団の輪の外にすることが多く、回避的。人見知りが強い。などコミュニケーションも含めた、対人関係・社会性に問題がみられる。

パターン化した行動（常同的、反復的）がみられる。

軽度発達障害（広汎性発達障害）が疑われる。

5) 総合所見に基づく支援目標

支援仮説 まほろば活動の実践仮説に基づき、

- ・発達スタッフが、発達上の課題を明確化する。
- ・A男の視覚・聴覚・持続時間等を配慮し、興味・関心がもてる場を設定する。
- ・保育スタッフが、A男のサインを、前後の状況と関連性のなかで共感的に受けとめ、楽しめる活動へとひろげていく。
- ・発達年齢が同じ程度の子どもボランティアの活動にA男の関心を引きつけ双方の交流がおきやすい状況をつくりだす。

このような発達支援保育の実施により、A男の社会的不適応が軽減すると仮説する。

長期目標

コミュニケーションも含めた、対人関係・社会性の問題を前記支援仮説によって支援し、保育園等での集団における社会生活の不適応を軽減する。

短期目標

- ・（指導者との1対1のやりとりを通し、）対人関係の基礎を確立する。
- ・見通しをつけるための“手がかり”を適切に提案していくために、時間・空間の構造化をはかる。

支援計画

- ・A男の要求を受けとめ、楽しい経験を共有する。（＝楽しめるあそびをふやす）
- ・視覚的な手がかりを元にした声掛けをする。
- ・時間的な見通しが立てられるような「構造化」を目的とした活動の導入。
- ・攻撃的行動ははっきり禁止する。

III 結果

表III-1：対象児の項目別時系列的变化 参照

IV 考察：対象者の発達のメカニズムと新たな評価・支援に向けて

1) 対象者の時系列的变化のメカニズムに関する検討
 固執傾向はあるが、子どもスタッフ Yr 君との関係のなかで調整できるようになり、Yr 君とのあそびのひろがりから、「輪」に近づき、中に入ることもできるようになった。他の子どもへの興味もでてきた。発達検査の結果からも言語・社会領域の発達ののびが顕著である。
 強制的な声かけや注意等による場面の切り替えや集団指導ではなく、
 ・ A 男の視覚、聴覚、持続時間等を配慮し、興味、関心がもてる場の設定
 ・ A 男の「みたて」を共感的に受けとめ、楽しめる活動へとひろげる保育スタッフの存在
 ・ 生活年齢ではなく、発達年齢が同じ程度（4 歳児）の子どもスタッフの存在
 という支援仮説をもって、大人や仲間（子ども）との相互関係のなかで、「そのときの子どもの気持ち」に目を向け、子ども主体に主導的活動であるあそびを保

障した活動のなかで、A 男の「みたて」や子どもボランティア（Y 君）の想像力を、スタッフが子どもたちが「楽しい」と思えるような場をつくり、A 男の関心をひきつけ（注視）、双方向の交流がおきやすい状況をつくりだしたことが、A 男が、子ども集団の中に自ら参加し、対人関係等の問題が軽減した要因としてあげられると思われる。

2) 目標設定・支援方法の妥当性、支援効果の検討

A 男の子ども像が、広汎性発達障害が疑われる子どもから、その発達障害の特徴が少なくなり、発達がゆっくりな子ども像へと変わってきていることは、コミュニケーションも含めた、対人関係・社会性の問題が軽減されたからであると思われる。目標設定、支援方法が妥当であったと考える。

しかし、週 1 回の支援保育の限界も感じており、親の承諾のもとに、A 男が通う保育園との直接的な連携も必要ではないかと思われる。また、常に変化していく親の子どもに対する不安や問題意識に適切に対応していく必要性を痛感している。

表III-1：対象者（A 男）の項目別時系列的变化

	I 期（1～3回）	II 期（4～9回）	III 期（10～15回）	IV 期（16回～）
登園時のようす	・両親と離れることに不安が強く、泣く。	・泣かない。 ・「〇したら帰る」と言い続ける。	・楽しみに登園。 ・箱や広告で作った剣など必ず持参する。	・Y 君とあそぶの楽しみに登園。 ・広告で作った剣を持参。
コミュニケーション	・語彙も多く、多弁であるが、対話場面では疎通性が乏しい。 ・反響言語多い。 ・ことばでの指示（-）	・対話場面での疎通性少してきてきた。 ・反響言語あり。 ・ことばでの指示（+） ・ことばでの要求（+）	・対話場面で双方向（-） ・反響言語少ない。 ・人称代用あり。	・対話場面で時々双方向（+） ・反響言語ときどき。 ・場面にあったことばがでるようになった。
対人関係・社会性	・チラッとみるが、輪から遠ざかる。 ・人見知り強い。特定の T とのみ関わられる。	・制作活動（折り紙など）において他児の模倣をする。 ・パトシリレーをする。	・輪のそばにいる。 ・あそびに誘うのはおとなのみ。 ・スタッフが 1 対 1 対応であることが多い。	・Y 君のつなぎであそびが広がる。 ・輪に近づき、輪のなかに出入り入ったり。
行動面	・降園時刻を気にして T へ何度も時間の確認をする。	・前回の活動を記憶し、T へ「〇〇は？」と問う。	・常同行動（箱を紙で包み袋に入れる）後に活動に参加。	・Y 君と 2 人で行動する。 ・Y 君を模倣する。
こだわり	・興味・関心の偏りとそれへの固執傾向がある		→	・固執傾向はあるが、他者（Y 君）との関係の中で、調整できることがある。
興味・関心	・「ハリケンジャー」などヒーローキャラクター	・ヒーローキャラクター ・折り紙	・箱をビニール袋に入れて持ち歩く。	・他の子どもへの興味（+） ・昆虫・恐竜
あそび	・もてあそび（水あそび・砂あそび）	・模倣あそび（日常生活を再現して楽しむ）	・役割あそび（みたて・つもりを楽しむ。役割を楽しむ並行的なあそび）	・役割あそび（他の子とかかわりができているが T の援助が必要）

* 「輪」…複数の子どもであそびや活動を共にしている状態

「T」…スタッフ 「Y 君」子どもボランティア（4 歳児）